

バレエ：お稽古事からバレエダンサーへ

草刈民代

1965年東京生まれ。バレリーナ、女優。

8歳でバレエをはじめ。

1983年『恋の糸』で主役デビュー。

国内、海外公演を精力的に果たし、数々の受賞を経験。

1996年公開の映画『Shall we ダンス?』で日本アカデミー賞新人俳優賞、最優秀主演女優賞を受賞。

気に入ったダンサーしか出演を許さないという振付家ローラン・ブティの作品

『若者と死』に出演以降、

ブティ作品の日本公演には必ず出演するようになる。

2009年、自らのプロデュース公演でバレリーナとしての舞台活動を引退。

舞台や映画、ドラマで活躍の場を広める。

習い事と「できた感じ」

バレエを習うたいがいの人が「できた感じ」を味わってないと思うんですよ。自分には合わないとか、別のことをやったほうがいいんじゃないかとか、そういうことでやめていく人のほうが多いと思います。だから、たぶん「子どもの頃は習ってたんだけど」というところで止まって「できた！」という感じをつかんでる人はいない。

バレエって、続けるのがすごく大変なので、習ったことのある人は、まずその大変さはわかっています。まず、それがわかるから、けっこうつらいんですよ。「バーにつかまって手を広げた形を取るだけでもすごくつらい」って……うちの妹は言って、「なんで私がこんなことしなきゃいけないんだと思ったら、お稽古に行きたくなくなっちゃった！」と言ってやめました。

結局は、そのつらさが「適性かどうか」なんだと思います。私はそんなの当たり前だと思ってました。全然つらいと思わないし、多少難しくてもできないとか、ちょっとつらいことが歓びだったりしますから。大変なことをやればやるほどおもしろいと思えました。

小さいときも、いまもそうです。そういう肉体的苦痛が苦手な人はバレエには向かないので、そこで適性がわかっちゃう。5年生ぐらいからずっと毎日、稽古しているんですが全然平気でした。友だちと帰る方角が違うとか、一度家に帰ってからすぐ出るとか、そういうことは当たり前だと思っていました。むしろ、そういう生活をしてる自分が誇らしいと思っていたところもあったんじゃないでしょうか。

他の子とは違うということをうれしいと感じる、私はおそらくそういう性格なんでしょう。そういうほうが、自分を支えているという感じがして、合っていたみたいです。

そういうダンサーは多いですよ。上に行けば行くほどそうです。そうでないとまず体が作れません。全身をさらして踊るので、「バレエの奴隷」くらいじゃないと、舞台上立ってお客さまを引っ張り、周りのダンサーを引っ張る、という存在にはならない。

美意識とストイック：「バレエの奴隷」

「あ、これはすごい」と思うダンサーはほとんどそうです。すごい人はみんなそうだから、そういうものなんだと思っています。とにかくストイックですね。バレエダンサーは最もストイックな人たちだとよく言われます。男性も、足の形がきれいじゃなければだめだし。

足先をどうやって伸ばせばきれいなのか、鏡見ながら毎日毎日、子どもの頃から稽古してるんです。美意識のあり方がちょっと違うのかもしれませんがね。

役者さんは鏡があると稽古しづらいと聞いたことがありますが、私は、8つのときから毎日鏡いちめんの場所に立ってたので、全身さらされてもあまり気になりません。

気をつけながら体を動かしたり稽古をすると、自分のイメージのほうへ体が近づいていきます。

目も耳も全部、自分をジャッジするためのもので、それは子どもの頃からずっと養っちゃっています。そのストイックさについては、ダンサーはみんなそうだと思います。

そのハードルがより高く訓練されちゃうのかもしれないですね。身体は、自分なんだけれども、体のパーツはすべて部品のように動かなきゃいけない。手をおろすときも、バレエでは美しくなくてはいけないのですが、それは、自分がイメージする形というよりも、「その形」がすでにあって、それを習得し、その上できれいにしなくてはなりません。

ですからバレエは「自分が、自分が」と言う人は、上達しづらいと思います。徹底的に人の言うことを聞く人のほうが上達しやすい。私が、「あ、この人はすごい」と思う人はいろんなものをちゃんと受け入れて、最後に自己主張する、という人が多いんです。

特に女性が多いけれど、それは決して「私が、私が」ではない。そういう人たちはとても立派です。そういう方々に教わってきたからそう思うのかな。

その人の言ってることをすべて受け入れる形じゃないと、踊りの稽古は、うまくいきません。私はわりと人を選ばず、言われたことはなんでも聞くという姿勢で仕事をしてきたつもりですが、「わあ、すごい！」と思わせていただける方のほうが、どんどん吸収していけます。鏡は見ちゃいけないんです。私たちは鏡の前で踊るんだけど、鏡を見続けてはいないんです。

あれは中学生ぐらいのときかな、鏡に向かって稽古してるのに「鏡を見ちゃだめだ」と言われました。「鏡は見るな」と言われながら、鏡の前でずっと練習する。みんなそういう状況で稽古してます。

いわば「見方を習得」するんです。鏡を見ると、まずは目線の定まり方が甘くなります。ですから、鏡のないほうへ向きを変えて練習することもあります。

しかし、バーにつかまって稽古するようなときは、鏡の前で、自分で細部をチェックします。鏡の前で「鏡を見るな」と言われながら稽古することでいろんな見方を覚えていくんですよ。

ツアーなどでなじみのない稽古場で稽古をするとき、「クラス(基礎稽古)は鏡向きと鏡なし、どちらでやる？」と訊かれたりすることもあります。ほとんどの人が「鏡を見ながら稽古する」と答えます。私も、自分の基礎練習は、ウォーミングアップも兼ねていますので、鏡を見ながら自分でチェックできたほうが良いと思っています。

個人レッスンでない場合は、先生のチェックだけでは足りなくて、自分でもチェックしながら稽古する。肉体を作り、動きを習得し、そのうえで作品のリハーサルをします。

「クラス」で作ったものを作品の練習で統合していき、また次の日も「クラス」からはじめる。そのくり返しで、バレエの舞台は作られていきます。

基礎の動き——例えば足先ひとつ伸ばすにしても、そのダンサーの質があらわれてしまいます。ダンサーのレベルがすべて「クラス」の動きに投影されます。つまり「クラス」は動きの質を高めるためのものでもあるので、どこまでやればゴールだ、ということではありません。プリエ(膝を曲げる)という屈伸運動からはじまって、足先を伸ばす、少しずつ足を上げていく。それを、どんな音楽に合わせてどういう順序でやっていくかは、体がどう作られるかということにまると影響していきます。

バレエはひとつの学問

バレエの歴史が古い国では、バレエの教師になるために、教員免許が必要です。教員免許を与える大学では、解剖学、コンビネーションの作り方、何歳のときにどういうレッスンをするか、カリキュラムの作り方も学びます。そのカリキュラムに沿って音楽と動きのコンビネーションも学び、「この年齢の人たちに どういうコンビネーションを作りますか？」というようなことがテストに出たりする。完全に学問です。いい先生の「クラス」は、3日受けたら体が変わってきます。

日本では、舞台上で踊るだけで生活できる人の数は少ないです。日本人は、そういうところで安全を確保しつつ広げる、というやり方がどうも根本にあるみたいです。

例えば、日本舞踊でもバレエでも演劇でも、踊る人がチケットを持ってさばいたりしますが、そういうくみは外国にはありません。外国の人がそれを聞くと、「ええっ？」「そんなことよく考えつくね」と言いますよ。それは、日本の伝統的な形なんだ、と思います。

そういうことひとつとってもバレエの存在のしかたは、日本だけ違います。韓国も、かなり欧米に近い。ですから、外国のダンサーから「どうして日本ってこうなの？」と聞かれることが非常に多かったです。そういうことが積み重なってくると「なんで日本だけこうなんだろう？」と思うようになって、まるで自分が責められているような気分になりました。

外国では、日本のバレエはレベルが低いというイメージを持たれていたのかもしれませんが。踊っている人のレベルもヨーロッパやアメリカに比べれば全然レベルが違っていたと思われていました。

結局、私はそういうところに葛藤がありつつ踊ってたんですが、時間とともに、能力ってそんなに違うものなんだろうか、という疑問を持つようになりました。

最後のほうになって思ったのは、能力は個人の問題であるということ。そして、日本の場合は、ダンサーたちが環境にかなり左右されちゃっている、ということでした。

日本の環境では、先が見えづらいので、目指すところがどこにあるかもわかりづらい。レベルを上げていくのはとても大変です。

海外には「劇場」という就職先がある。そこに入ることができれば、生活の保障もある。日本は「あの劇場に行きたい」という意思を持てる場所がなかなかありません。

十数年前に新国立劇場ができましたが、それ以外はないし、新国立劇場も、年間の公演回数が多いわけじゃありません。保障の形態も、海外とは違います。

日本の場合、しくみの作り方がトリッキーだとすら感じます。日本の文化って、芸術にかかわるものの、表現活動をしている人たちに対しては、「好きなんだから、やれてるんだから、いいじゃない」というようなところがあるでしょう？そういう風潮があるから、表現活動をしている人にとっては大変な環境だと思います。

お金を稼ぐということ

でもほんとうはそういうものではないと思う。**仕事でないとやりきれない**んです。自分の経験から言ってもプロになるには、仕事として経験していかないと身につかないものや、越せないものが確かにあります。映画に出る前の私は、越さなきゃいけないものを越すには何をどうしたらいいんだらうって、ずっと思っていました。28歳のときにケガで椎間板ヘルニアになりました。このまま続けてもしょうがないと考えつつ、でも自分は踊りしかできない、という状況でした。

でも、機会をもらって映画に出て、世間的な知名度が上がったおかげでバレエの仕事が増えた。そのぶん収入も変わりました。そうすると、自分に必要だと思うトレーニングやレッスンにもものすごくお金がつぎ込めるようになったんです。当時の日本では、トレーニングと併わせて体作りをしているダンサーは少なかったのです。

私がそういうことをやりはじめたら、周りの先生たちにもものすごく批判されたんですよ。

「トレーニングと組み合わせても、バレエダンサーの体にはならないよ」と。

でも私は、ケガを克服していかなきゃならなかった。私はケガが多かったのだけれど、結局はバレエの稽古だけでは補えない部分があるのではないかと考えたわけです。トレーニングなどにお金をつぎ込む必要があったのは、機能的なダンサーの体になるために、トレーナーと試行錯誤をする必要があったからです。トレーナーの方はバレエのことを全く知らなかったし。

結局7年間で腰痛は一切なくなって、体も変わり、踊りのレベルもすごく上がりました。やはり自分が思う存分使えるお金がなければ、なかなかそこまではできません。

お金を稼ぐということがどれだけ大事わかります。日本では、資質や能力が高くても、環境につぶされることも多いと思います。私はわりと性格的に強いところもあるし、ほかの仕事をしてても踊りをやりきるという筋は曲げなかったのでもろんなチャンスを踊りを活かすためのものにできました。

でも、それを踊ってる本人全員に求めるというのも、ほんとうは変な話です。外国では、その環境があるから人が育つのです。日本人がバレエに向かないというふうにならずにずっと信じられていた歴史がありますが、そのせいにしちゃいけないんじゃないかと、最近、すごく強く思います。

日本でレベルアップするのは、実はとても大変です。若いうちは親に世話になったりして踊ってる人が多いですけど、それもどうだろう？ 援助してもらっていると、実験的なことはなかなかできなかつたりするから、それも結局は不自由だと思います。というか、私はその不自由さをかなり味わいました。

踊りをやってきた人というのは、世間からの信用って、そんなに簡単に得られないという気がするんですよ。「踊りしかしてないから何もわかんないだろう」と思われているんじゃないでしょうか。

私は、踊りの発表に、ステージのギャラ交渉まで自分でやっていました。私は「バレエ」という豊かな環境ではないところでやってきたので、「なんでもやります」というタイプです。それで、結論はいつも「自分でやっちゃったほうが早い」結局、自分でチケットを売るところからやるようになったんです。